

三川町方言話者における方言と標準語の使い分け

—「道教え談話」の分析を通じて—

合津 美穂

1. はじめに

2002年9月に山形県東田川郡三川町で実施した方言調査において、若年層・中年層・高年層の各世代から、同一の地図を発話刺激として用いた「道教え談話」を収録した。本稿では各世代の方言と標準語による「道教え談話」の分析を通じ、方言と標準語の使い分けを談話の構造・文法・語彙の各側面から捉えてみたい。また、そこにはどのような世代差があるのかについてもみていきたい。

2. 先行研究

三川町方言話者の方言と標準語の使い分けに関する先行研究には、佐藤（1996）がある。

佐藤（1996）は、1988年に三川町で行った方言と標準語の使い分けに関する実態調査の結果を報告している。調査対象者は、若年層（20・30歳代）25名、中年層（40・50歳代）24名、高年層（60歳以上）21名、合計70名である。調査は、語彙・文法・アクセント・音声に関して、1. なぞなぞ式質問法、2. 場面設定法、3. 調査文朗読法（アクセント項目のみ）の3種の方法によって行われた。「場面設定法」に関しては、ア. その土地で親しい友人と話す場面（下位場面）、イ. その土地でややあらたまって話す場面（中位場面）、ウ. 東京の初対面の人と話す場面（上位場面）の3場面が設定された。この調査では次のような結果が得られている。

- (1) 下位場面における方言形の出現率は、全項目の平均値においては世代差が小さいが、中年層の数値が他の世代よりもやや高く、中でも音声項目において顕著である。項目別にみると、文法とアクセントの数値（全世代の平均値）が語彙や音声よりも高い。
- (2) 上位場面における標準語形の出現率は若年層が高いが、これはアクセント項目の高さによるもので、アクセントを除けば全体としては中年層の数値が高い。項目別では、全世代を平均すると語彙、音声、文法、アクセントの順で標準語形の出現率が高い。
- (3) 方言と標準語を使い分ける能力は、アクセントを除くと、どの項目も中年層

が最も高い。項目間の使い分け度は、語彙が最も大きく、アクセントが最も小さい。アクセントは若年層以外はほとんど使い分けられていない。音声項目は他の項目に比べて世代間の差が大きく、中年層の使い分け度の高さが顕著である。

以上は、長くても一文レベル単位における方言と標準語の使い分けについて調査した結果である。実際の言語使用場面では、一文レベル以上の文の組合せからなる談話というより大きな単位でコミュニケーションがなされることが多い。談話レベルにおいて、方言と標準語はどのように使い分けられているのだろうか。

本稿では、「道教え談話」という意味あるひとまとまりの談話における方言と標準語の使い分けの実態を、談話の構造・文法・語彙の側面から捉えることを試みる。佐藤（1996）では、上述の通り、音声項目の切り替えに大きな世代差があらわれたことが指摘されているが、「道教え談話」における音声面での切り替えについては、紙幅の関係上、別の機会に論じたい。

3. 談話資料について

3. 1 調査の方法

陣内正敬氏の「道教え談話」研究の調査方法を参考に、面接方式で次のように行った。

- 1) 地図¹（資料「地図」参照）を話者に提示し、点線で示した道順で×印から駅までの道順を教えるという場面を設定する。
- 2) 道を教える相手について説明し、地図を見ながら各相手に対して駅までの道順を話してもらう。

道を教える相手は、「三川町出身・在住」・「三川町以外の出身・在住」×「親」・「疎」の4つのパターンに設定した。具体的には、①「三川町出身・在住の親しい同世代の友人」、②「三川町出身・在住のあまり親しくない目上の人」、③「東京から来た親しくなった学生（調査者）」、④「東京から来た中年の見知らぬビジネスマン」とし、各相手に対する談話を収集した。

世代差をみるために、若年層（20歳～34歳）6名、中年層（35歳～59歳）10名、高年層（60歳以上）10名の計26名に対して、調査を実施した。

談話はテープレコーダーで収録し、井上（1994）の音韻表記に従って、文字化を行った。

3. 2 談話資料の特徴

今回、分析の対象とする「道教え談話」は、上述の方法によって、全て同一の地図を使って収集されたものである。全くの自由談話とは異なり、述べるべき内容は地図によってある程度、拘束されているという特徴を持つ。それゆえ、各世代、各コード間の相違を談話レベルで比較することが可能であると考ええる。

本稿で扱う「道教え談話」は、実際に相手に語りかけるのではなく、擬似的に場面を提示して収集したものである。相手とのやりとりの中で、相手の反応に応じて動的に談話を展開していく自然談話の資料と異なり、ひとまとまりの発話に伝えるべき内容が一気にもりこまれている。相手に応じて談話展開がなされる前の、基本的にこういう伝え方をしたいと話者が考えている、道教えのイメージが具現された談話である。対面場面における談話は今回の調査では収録しなかったが、相手との相互作用によってどのような談話展開がなされるか、今回の談話とどのような相違があるかについては、ひとまず今後の課題としておきたい。

4. 分析と考察

本稿では、収録した談話のうち、方言的特徴が最も強く現れた①「三川町出身・在住の親しい同世代の友人」に対する談話と、標準語的特徴が最も強く現れた④「東京から来た中年の見知らぬビジネスマン」に対する談話をとりあげる。それぞれを「方言コード」と「標準語コード」の談話とし、両者の比較を通じて方言と標準語の使い分けをみていきたい。なお、談話の引用に際し、話者の世代は、高年層をA、中年層をB、若年層をCで表し、A1、B1、C1などのように話者番号とともに記す。

4. 1 談話の構造

録音資料を全て文字化した後、「道教え談話」を構成している単位（以下、「構成要素」とする）を捉えるために、1) 言い淀み、フィラーなどは全て除く、2) 言い間違いをしたことに気づき、訂正をしている場合は、基本的に訂正後のものを採用する、という方法で文字化資料を整理した。その結果、今回収録した「道教え談話」は、次の10の構成要素が任意に組み合わせられて構成されていることがわかった。

<始 点>：移動を開始する地点

例)「コッカラ」

<転換点>：「曲がる」という方向転換を伴う移動が行われる地点

- 例) 「ソコノ ジュージロデ」、「ユービンキョクノ トコロオ」
- <経路> : 移動が行われる道
 例) 「ソノ ミチオ」、「コンビニノ メー」
- <通過点> : 移動の過程において、方向転換を伴わずに通過される地点
 例) 「コーバンオ」
- <到達点> : 目的地である「駅」に到着することについての言及
 例) 「エキダ」、「エキサ ツクヨ」、「エキカ° アリマス」
- <移動> : 移動動詞によって提示される行為
 例) 「マカ° ッテ」、「トーリスキ° テ」、「アルイテイクト」
- <目印> : 目印となるものについての言及
 例) 「ユービンキョクカ° アリマスノデ」、「コンビニカ° ミエテクルノデ」
- <方向> : 移動の方向
 例) 「ヒダリサ」、「ミキニ° 」、「マッスク° 」、「ミチナリニ」
- <程度> : 移動にかかる時間や距離についての言及
 例) 「シバラク」、「ズット」、「ヒヤクメートルグライ」
- <状態> : 移動するときの状態についての言及
 例) 「ソノママ」

構成要素のラベル付けを行った、各世代の方言コードの談話例を以下にあげる。

○高年層 (方言コード)

A7 : ココ マッスク° イッテノ

<経路> <方向> <移動>

テージロデ ヒダリニ マカ° ッテ

<転換点> <方向> <移動>

デ ヨズカドオ コンド ミキ° サ マカ° ッテ

<転換点> <方向> <移動>

デ マタ テージロデ ヒダリサ マカ° ル

<転換点> <方向> <移動>

ソレカラ コンビニ ドッカラ ミキ° サ マカ° ッテ イグト

<転換点> <方向> <移動> <移動>

エギサ ツグ

<到達点>

○中年層（方言コード）

B9 : ココノ ミチ イッポン トリスキ° テ マッスク° イクト
<通過点> <移動> <方向> <移動>

ヒダリサ ギンコー アッサケ ソイドコ ヒダリニ マカ° ツテ
<目印> <転換点> <方向> <移動>

シバラク スツト ユービンキョク ミキ° サ ミエッサケ
<程度> <目印>

ソコドコ ミキ° サ マカ° ツテ デ ズツト イクト
<転換点> <方向> <移動> <程度> <移動>

コーバン ミエッケドモ ソコ ソノママ イクト
<目印> <通過点> <状態> <移動>

ツキアタッサケ ツキアタッタ トコオ ヒダリサ マカ° ツテ
<目印> <転換点> <方向> <移動>

デ シバラク スルト ミキ° サ コンビニ ミエッサケ ソイドコ
<程度> <目印> <転換点>

ヒダリサ マカ° ツテ ズツト イクト エギサ ツク
<方向> <移動> <程度> <移動> <到達点>

○若年層（方言コード）

C3 : ココドコ マッスク° アッチノホーサ イテ
<経路> <方向> <方向> <移動>

ツギアタリドコ ヒダリサ マカ° テ デー チョット イクト
<転換点> <方向> <移動> <程度> <移動>

ミキ° カ° ワサ ユービンキョク ミエッサケ ソノ ジュージロドコ
<目印> <転換点>

コンド ミキ° サ マカ° テ デ ソノママ マッスク°
<方向> <移動> <状態> <方向>

ツギアタリマデ イッテ コンド ヒダリサ マカ° テ
<目印> <移動> <方向> <移動>

ミキ° カ° ワサ コンビニ ミエツサケ ソコドコ マダ ミキ° サ
 <目印> <転換点> <方向>
マカ° テ ミチナリサ イグド エキダ
 <移動> <方向> <移動> <到達点>

構成要素の使用数は、方言コードと標準語コードにおいて差があるのだろうか。また、使用数に世代差はあるのだろうか。

表1は、各コードにおける構成要素の平均使用数を世代別にまとめたものである。

	方言コード	標準語コード
高年層	21.3	23.9
中年層	27.0	25.0
若年層	21.5	20.2
全体	23.5	23.4

表1 構成要素の平均使用数

全体として、コード間による使用数の差はほとんどない。世代別に見ると、高年層では方言コードに比べ、標準語コードではやや使用数が増加している

のに対し、中年層と若年層では、標準語コードの方が若干使用数が少ない。中年層は他の年層に比べて、方言コード・標準語コード双方において使用数が多く、最大は方言コードにおける使用数 27.0 である。反対に最も少ないのは、若年層の標準語コードにおける使用数 20.2 である。

標準語コードでは丁寧さを表すために詳しく説明しようとし、それによって構成要素が増加するのではないかと予測したが、高年層を除き今回の談話では特にそうした特徴は認められなかった。同一話者の方言コードと標準語コードの談話を比較すると、構成要素をそれほど変化させるのではなく、方言的特徴のある形式を切り替える傾向が強かった。この傾向は特に若年層に顕著であり、例えば次の談話のようである。

○若年層（方言コード）

C6 : ココドゴ マツスク° イツテ
 <経路> <方向> <移動>
ギンコーノ カドドゴ ヒダリサ マカ° ツテ
 <転換点> <方向> <移動>
ユービンキョクノ カドドゴ ミキ° サ マカ° ツテ
 <転換点> <方向> <移動>
マツスク° イツテ
 <方向> <移動>
ヒダリサ コーバン アルカラ ソコ トーリスキ° テ
 <目印> <通過点> <移動>

増加している。一方、中年層は標準語コードにおいて<方向>の使用が若干増加しているが、方言コードと標準語コードにおける他の構成要素の使用数の差はそれほど大きくない。若年層は標準語コードで<移動>の使用が若干増加しているが、その他の構成要素の使用数については、両コードの差は特に大きくない。

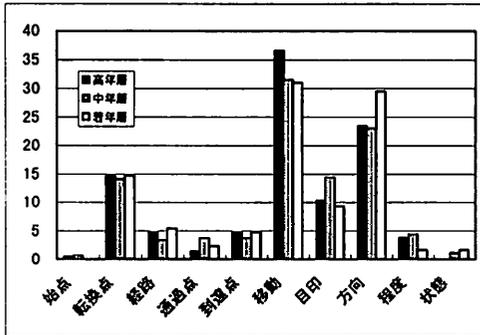


図1 各構成要素の平均使用数(方言コード)

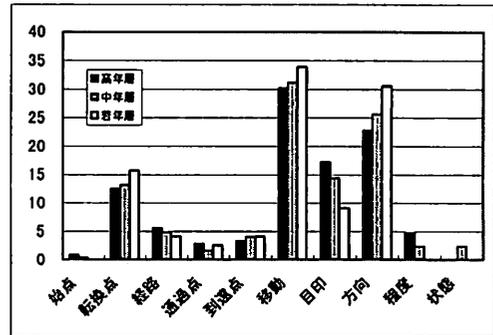


図2 各構成要素の平均使用数(標準語コード)

4. 2 文法

文法面においては、全世代において方言形がよく使用され、なかでも二格とヲ格の格助詞の形式とその切り替えが特徴的であった。

4. 2. 1 二格の格助詞

まず、二格の格助詞についてみていこう。

今回収集した「道教え談話」にあらわれた二格の意味役割には、「方向」「動作の到達点」(以下、「到達点」と略記)、「存在する場所」(以下、「存在場所」と略記)が認められた。

表2・3は、二格にあらわれた格助詞の形式と使用率を用法別にまとめたものである。()内は使用度数を示す。以下に、方言コード・標準語コードにおける各用法の使用形式の特徴について、世代差に着目しながら述べる。

(1) 方向

方言コードにおいては、全世代において「サ」と「ニ」が使用されたが、東北方言の一特徴とされる「サ」の使用が多い。但し、「サ」の使用率には世代差がある。中年層と若年層では「サ」の使用率が90%以上を占め、「ニ」の使用率は10%に満たない。一方、高年層では「サ」の使用率は63.9%とかなり減る。

標準語コードでは、中年層と若年層で全て「ニ」が使用されているのに対し、高年層では「ニ」の他に、「エ」と方言形の「サ」も使用されている。高年層は、他の用法においても標準語コードで方言形の「サ」を使用しているが、他の用法に比べて「方向」の「サ」は使用度数が高い。方言形の「サ」は、標準語コードにおいても、本来の用法であるとされる「方向」の用法で使用されやすいようである。

○方言コード

A1 : ヒダリサ マカ° ッテ

B9 : ヒダリニ マカ° ッテ

○標準語コード

A9 : ヒダリサ マカ° ッテ

C2 : ヒダリニ マカ° ッテ

A8 : ヒダリエ マカ° ルト

(2) 到達点

方言コードにおいては、中年層と若年層では全て「サ」が使用されたが、高年層では「サ」と「ニ」が同数使用されている。

標準語コードでは、中年層と若年層で全て「ニ」が使用されているが、高年層では「ニ」の他、「エ」と「サ」も使用されている。

○方言コード

B3 : エキサ ツク

A10 : エギニ イマ ツク

○標準語コード

A1 : エギサ イギマス

C1 : エギニ ツキマス

A5 : エギエ ツキマス

(3) 存在場所

方言コードにおいては、全世代において「サ」と「ニ」が使用されたが、「サ」の使用率には世代差がある。中年層と若年層では「サ」の使用が「ニ」の使用よりも多いが、高年層では「ニ」の使用が「サ」に比べてやや上回る。

標準語コードでは、中年層と若年層で全て「ニ」が使用されているのに対し、高年層では「ニ」の他に、「サ」も使用されている。

○方言コード

C5 : カドサ コンビニ

アッカラ

B5 : ミキ° テニ コンビニ

アル

○標準語コード

A1 : コーバン ヒダリサ

アリマス

B3 : ヒダリテニ ギンコー

アリマスノデ

	方向		到達点		存在場所	
	サ	ニ	サ	ニ	サ	ニ
高年層	63.9 (23)	36.1 (13)	50.0 (6)	50.0 (6)	44.4 (4)	55.6 (5)
中年層	90.7 (39)	9.3 (4)	100 (11)	0 (0)	88.2 (15)	11.8 (2)
若年層	95.8 (23)	4.2 (1)	100 (1)	0 (0)	90.0 (9)	10.0 (1)
全体	82.5 (85)	17.5 (18)	75.0 (18)	25.0 (6)	77.8 (28)	22.2 (8)

表2 二格の格助詞の形式と使用率(方言コード)

	方向			到達点			存在場所	
	サ	ニ	工	サ	ニ	工	サ	ニ
高年層	29.4 (10)	58.8 (20)	11.8 (4)	9.1 (1)	81.8 (9)	9.1 (1)	6.7 (1)	93.3 (14)
中年層	0 (0)	100 (45)	0 (0)	0 (0)	100 (12)	0 (0)	0 (0)	100 (13)
若年層	0 (0)	100 (28)	0 (0)	0 (0)	100 (3)	0 (0)	0 (0)	100 (6)
全体	9.3 (10)	86.9 (93)	3.7 (4)	3.8 (1)	92.3 (24)	3.8 (1)	2.9 (1)	97.1 (33)

表3 二格の格助詞の形式と使用率(標準語コード)

4. 2. 2 ヲ格の格助詞

次に、ヲ格の格助詞についてみていく。

杉本(1986)によれば、ヲ格の意味役割には、「動作・作用の対象」「移動に関わる場所」「動作・作用の行われる状況」がある。今回収集した談話にあらわれたヲ格は全て「移動に関わる場所」を示し、動詞との関わりにおいて、方向転換が行われる場所を表す「転換点」、移動の「経路」、通過される地点を表す「通過点」の3つに下位分類された。

表4・5は、ヲ格にあらわれた格助詞の形式と使用率を用法別にまとめたものである。()内は使用度数を示す。三川町方言では、ヲ格は無助詞で表されることが多いが、方言コードのヲ格には様々な形式が用いられた。以下に、方言コード・標準語コードにおける各用法の使用形式の特徴について、世代差に触れながら述べる。

(1) 転換点

方言コードにおいて、高年層では「無助詞」「オ」「カラ」「デ」「サ」の5形式、中年層では「無助詞」「オ」「トコ」²「カラ」「デ」の5形式、若年層では「無助詞」「オ」「トコ」「デ」の4形式が使用された。

高年層で「サ」が1例使用されたが、この結果からだけでは、単なる誤答か、ヲ格の意味領域に踏み込んだ用法に相当するものなのかどうかはわからない。4.2.1でみたように、三川町方言の「サ」には「存在場所」を表す用法があることから、この点については、「場所性」という観点からヲ格の領域における「サ」の用法について調査してみる必要があるだろう。

高年層で最も使用率が高い形式「カラ」は、中年層ではあまり使用されず、若年層では全く使われていない。一方、中年層・若年層で最も使用率が高い形式「トコ」の使用が、高年層では皆無である。このように、「カラ」と「トコ」の使用には世代差が認められる。この結果が、三川町方言における「カラ」の衰退、「トコ」の使用の拡大を示唆するものなのかどうかは、今後、更に調査する必要がある。

標準語コードにおいては、高年層と中年層で「無助詞」「オ」「カラ」「デ」の4形式が使用されているのに対し、若年層では全て「オ」が使用されている。

○方言コード

B1: ソコ__ ヒダリサ マカ° ッテ

B4: ソコオ ミキ° サ マカ° ッテ

C4: ツキアタリドゴ ヒダリサ マカ° ッテ

A3: ソコカラ ヒダリニ マカ° ル

C2: ジュージロデ ミキ° サ マカ° ッテ

A8: ソコサ ミキ° サ マカ° ッテ

○標準語コード

B4: ソコ__ ヒダリニ マカ° ッテクダサイ

C5: ソコオ ヒダリニ マカ° ッテッテ

A5: ソコカラ ヒダリニ マカ° ッテ

A7: テージロデ ヒダリニ マカ° ッテ

(2) 経路

方言コードにおいて、高年層では「無助詞」「オ」の2形式、中年層と若年層では「無助詞」「オ」「トコ」の3形式が使用された。高年層と中年層では「無助詞」、若年層では「トコ」の使用が多い。

標準語コードにおいては、高年層と中年層で「オ」の使用が増加しているが、「無助詞」もみられる。一方、若年層では全て「オ」が使用されている。

○方言コード

- A2 : ソコ_ マツク° イグト
- B6 : ココオ マツク° イッテ
- C1 : ココドコ マツク° イッテ

○標準語コード

- A5 : ソコ_ マツク° イクト
- B5 : コノ ミチオ マツク° イッテクダサイ

(3) 通過点

方言コードにおいて、高年層では「無助詞」「トコ」の2形式、中年層では「無助詞」「オ」「トコ」の3形式、若年層では「無助詞」「オ」の2形式が使用された。いずれの世代においても、「無助詞」の使用が多い。

標準語コードにおいては、中年層と若年層で全て「オ」が使用されている。高年層でも「オ」が使用されているが、「無助詞」もみられる。

○方言コード

- C5 : コーバン_ トーリスキ° テ
- B8 : ジュージロオ コエテ
- A10 : ココドコ イッポン オーダンシテ

○標準語コード

- A9 : コーバン_ トリコシテイッテ
- C2 : コーバンオ コエタ

	転換点						経路			通過点		
	無助詞	オ	トコ	カラ	デ	サ	無助詞	オ	トコ	無助詞	オ	トコ
高年層	3.2 (1)	25.8 (8)	0 (0)	54.8 (17)	12.9 (4)	3.2 (1)	80.0 (8)	20.0 (2)	0 (0)	75.0 (3)	0 (0)	25.0 (1)
中年層	20.0 (8)	32.5 (13)	37.5 (15)	2.5 (1)	7.5 (3)	0 (0)	50.0 (4)	25.0 (2)	25.0 (2)	66.7 (6)	22.2 (2)	11.1 (1)
若年層	10.0 (2)	30.0 (6)	45.0 (9)	0 (0)	15.0 (3)	0 (0)	28.6 (2)	14.3 (1)	57.1 (4)	80.0 (4)	20.0 (1)	0 (0)
全体	12.1 (11)	29.7 (27)	26.4 (24)	19.8 (18)	11.0 (10)	1.1 (1)	56.0 (14)	20.0 (5)	24.0 (6)	72.2 (13)	16.7 (3)	11.1 (2)

表4 ヲ格の格助詞の形式と使用率(方言コード)

	転換点				経路		通過点	
	無助詞	オ	カラ	デ	無助詞	オ	無助詞	オ
高年層	3.6 (1)	39.3 (11)	32.1 (9)	25.0 (7)	28.6 (4)	71.4 (10)	37.5 (3)	62.5 (5)
中年層	3.0 (1)	81.8 (27)	9.1 (3)	6.1 (2)	15.4 (2)	84.6 (11)	0 (0)	100 (3)
若年層	0 (0)	100 (20)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	100 (5)	0 (0)	100 (4)
全体	2.5 (2)	71.6 (58)	14.8 (12)	11.1 (9)	18.8 (6)	81.3 (26)	20.0 (3)	80.0 (12)

表5 フ格の格助詞の形式と使用率(標準語コード)

4. 3 語彙

方言語彙の使用自体が少なく、方言コードと標準語コードにおける語彙の切り替えはあまりなかった。ここでは使用に世代差らしきものが認められた、標準語形の「ミチナリ」と「ヨツカド」についてみていきたい。

(1) 「ミチナリ」

「道に沿って」の意味。陣内(1999)によると、田原・村中(1999)が東大阪市において収集した、「疎」の場面の「道教え談話」において、「ミチナリ」の使用に年齢差らしきものがみられたという。東大阪市で「ミチナリ」を使用するのは、どちらかというと中年層以下に多く、50歳を境目に比較すると、50歳以上では21人中3人、49歳以下で29人中13人であったという。

では、三川町方言話者においてはどうかであろうか。

表6は、本調査で得られた「道教え談話」における「ミチナリ」の使用者の割合を世代別にまとめたものである。

()内は使用者数を示す。

「ミチナリ」の使用者は中年層・若年層に多く、高年層の使用は少ない。東大阪市と同様、三川町方言話者の「道教え談話」においても、「ミチナリ」の使用には世代差らしきものが認められるようである。

	方言	標準語
高年層	0 (0)	10.0 (1)
中年層	30.0 (3)	40.0 (4)
若年層	50.0 (3)	16.7 (1)
全体	23.1 (6)	23.1 (6)

表6 「ミチナリ」の使用者の割合

「ミチナリ」は方言コード・標準語コードにおいて用いられており、使用の場面差は特になさそうである。

(2) 「ヨツカド」

「2本の道が交差し、4つの角ができていくところ」の意味。地図上のこうした地点は「ヨツカド」の他、「ジュージロ」「コーサテン」という語によっても表されている。

表7は、世代別にまとめた「ヨツカド」「ジュージロ」「コーサテン」の使用者の割合である。()内は使用者数を示す。

	ヨツカド		ジュージロ		コーサテン	
	方言	標準語	方言	標準語	方言	標準語
高年層	10.0 (1)	20.0 (2)	0 (0)	10.0 (1)	0 (0)	20.0 (2)
中年層	0 (0)	0 (0)	70.0 (7)	70.0 (7)	0 (0)	10.0 (1)
若年層	0 (0)	0 (0)	33.3 (2)	33.3 (2)	16.7 (1)	0 (0)
全体	11.5 (3)		73.1 (19)		15.4 (4)	

表7 「ヨツカド」「ジュージロ」「コーサテン」の使用者の割合

「ヨツカド」を使用しているのは高年層のみで

ある。中年層・若年層は同じ箇所を示すのに、「ジュージロ」「コーサテン」を使用し、特に中年層では「ジュージロ」の使用が多い。「ヨツカド」の使用には、世代差が認められるようである。

5. まとめ

以上、本稿では三川町方言話者の方言と標準語の使い分けについて、方言コードと標準語コードによる「道教え談話」を対象とし、世代差に着目しながら分析・考察した。談話の構造・文法・語彙の各側面における使い分けの特徴をまとめると、次のようになる。

- (1) 「道教え談話」の構成要素には、＜出発点＞＜転換点＞＜経路＞＜通過点＞＜到達点＞＜移動＞＜目印＞＜方向＞＜程度＞＜状態＞がある。特に＜転換点＞＜移動＞＜目印＞＜方向＞は「道教え」において重要な要素である。構成要素の使用数は、方言コードと標準語コード間において大きな差はない。世代別の使用数をみると、中年層の使用が比較的多い。
- (2) 文法面においては、ニ格とヲ格の格助詞の切り替えが、方言コードと標準語コードとの間で顕著に認められた。ニ格とヲ格に出現する格助詞の形式、および切り替えの様相には世代差がある。高年層では標準語コードにおいても方言形が使用されている。一方、中年層と若年層は、方言コードにおいて方言形をよく使用しているが、標準語コードにおいては方言形から標準語形へ明確に切り替えている。特に、若年層の使い分け度の高さが著しい。
- (3) 語彙面においては、方言語彙の使用自体が少なく、コード間における切り替えはあまりなかったが、標準語形の「ミチナリ」と「ヨツカド」の使用に世代差らしきものが認められた。「ミチナリ」は高年層にはあまり用いられず、「ヨツカド」は中年層・若年層には使用されにくいという傾向がみられた。

今回、分析し得た資料は用例数が少ないため、更に談話資料を増やし、以上の結果を検証・補強する必要がある。

今後は他地点でも同様の方法で「道教え談話」を収集し、特に談話の構造的側面において地域差があるのかどうか、比較・検討してみたい。

付記：談話資料の文字化に際しては、東京都立大学人文学部助手小西いずみ氏のご教示を賜った。記して感謝申し上げます。

注

1. 2002年7月に東京女子大学において三川町方言話者1名を対象に行った予備調査では、陣内(1999)所収の地図を使用した。談話を文字化した結果、地図が比較的単純なため得られる談話が短く、談話の構造的特徴が把握しにくいと思われた。そこで本調査では、新たに地図を作成し、使用した。
2. 「トコ」は談話において「ドゴ」と有声音で現れるが、本文中では全て「トコ」の形で示す。

参考文献

- 井上史雄(1994)「鶴岡方言の音韻」国立国語研究所編『鶴岡方言の記述的研究—第3次鶴岡調査 報告1—』秀英出版
- 国立国語研究所編(1974)『地域社会の言語生活—鶴岡市における20年前との比較—』秀英出版
- 佐藤亮一(1994)「鶴岡方言における助詞『サ』の用法—共通語との対応を中心に—」国立国語研究所編『鶴岡方言の記述的研究—第3次鶴岡調査 報告1—』秀英出版
- (1996)「方言の衰退と安定」小林隆・篠崎晃一・大西拓一郎編『方言の現在』明治書院
- 陣内正敬(1999)「関西地方の地域方言と社会方言」『日本語学』11月臨時増刊号 第18巻第13号 明治書院
- 杉本武(1986)「格助詞—「が」「を」「に」と文法関係—」奥津敬一郎・沼田善子・杉本武『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社
- 田原広史・村中淑子(1999)『東大阪市における方言の世代差に関する調査研究』平成9・10年度東大阪市地域研究助成金成果報告書
- 日高水穂(2000)「文法化の過程と地理的分布—対象格助詞コト・トコ類の分布と変遷—」『日本方言研究会第70回発表原稿集』日本方言研究会
- 村上恵(1996)「道順説明の構成要素と表現類型」『三重大学日本語学文学』7

(ごうづ みほ・東京都立大学大学院生)

資料 地図

